

カルロス・ルイス・サフォン著 木村裕美訳「天国の囚人」集英社文庫、集英社 2014 年 10 月 25 日刊
を読む

カルロス・ルイス・サフォン、天国の囚人

1. カルロス・ルイス・サフォンの小説には、映像があり、音があり、においがある。地中海の潮風と、光と影にかこまれた遠い風景、時にセピア色、時に色彩あふれるバルセロナの都で、作中人物たちが動き、会話し、思索する。『風の影』の世界的ヒット以来、度重なる映画化の誘いがありながら、作者が決して首を縦にふらないのは、サフォン自身が、“言葉のもつ魔力”を信じているからだろう。「読者が頭のなかの劇場で見るものが、最高の映画だ」と彼は言う。サフォンの作品を読みながら、私たちの脳裡に映しだされるシーン、心の小宇宙に創られていくイメージは、たしかに、世界にひとつしかない。

木村裕美

P372

2. 小説の背景となる時代は大きくふたつ、内戦(1936 ~ 39)直後と、作中の「現在」にあたる 1950 年代で、いずれも、スペインの歴史の特異な様相が作品に生きている。
3. フェルミンの回想に登場するのは、当時のスペインを生きた無名の人びと、あの時代に確かに存在した人間たちの投影だ。戦争は勝者と敗者を分断し、敗者は“政治犯”の^{かど}廉で次々投獄された。手元の資料によれば、内戦前スペイン全土で 1 万人程度だった囚人数が、内戦の終わる 1939 年には 27 万人にのぼったという。作中のサルガドに代表される過激な組合員や労働者はもちろん、サナウハのような医師や、教師、作家もいた。フェルミンの監獄仲間は、ある意味で“普通の人びと”だったのだ。
4. フェルミンが語るとおり、外の世界の人間たちは、おそらく沈黙することで時代を生きのびた。独自のアイデンティティーを誇るカタルーニャは、独裁政権下で政治的にも文化的にも厳しい弾圧の憂き目を見たが、そのなかにも庶民たちのささやかな日常があった。作中の「現在」では、人びとの淡い希望をのせたクリスマスの風景が、鮮やかに、時にユーモラスに描かれている。“カタルーニャ帽”をかぶった幼子キリストが出現する場面もそのひとつ(本書 283 ページ)。わずか 10 行弱の、一見なにげない描写だが、公の場でカタルーニャ語の使用も、民俗的表徴物も禁じられた当時のバルセロナの社会事情と、抑圧されるカタルーニャの人びとの思いが、絶妙なユーモア感覚をもって凝縮されている。

5. また 1950 年代は、フランコ政権がサッカーを国家的スポーツとして大々的に推進した時期。庶民のサッカー熱が、国家政策に沿う“時代の姿”だったわけで、そう見れば、作中、フェルミンと新しい教区教会の司祭が“バルサ”の会員というくだりも、なるほど合点がいく。フェルミンが示唆するクバラ選手は、共産圏ハンガリーから亡命したスター的存在で、政権側にとっても反共宣伝の好材料になったようだ。

P370 ~ 371

[コメント]

スペイン・マドリッド在住のスペイン語翻訳家、木村裕美さんの最新翻訳書は、スペインの大ベストセラー作家カルロス・ルイス・サフォンの「天国の囚人」。「風の影」「天使のゲーム」の続編で、「忘れられた本の墓場」四部作をつなぐ「^{かなめ}要」の作品。成熟社会、スペインの知識人の多くが愛してやまない現代小説の代表である本書を、木村裕美さんの日本語訳で是非、御一読を。

— 2014 年 10 月 25 日 林 明夫記 —